

時代の特色を捉える力を育てる中学校社会科学習指導の工夫 — パフォーマンス課題を取り入れた、歴史的事象を関連付けて捉える学習活動を通して —

大竹市立小方中学校 松岡 和恵

研究の要約

本研究は、時代の特色を捉える力を育てる中学校社会科学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、時代の特色を捉える力とは、歴史的事象を多面的・多角的に考察し、事象同士を関連付けることで本質的な因果関係を見いだし、概念的知識を習得する力とした。この力を育てるには、単元を構造化し、単元を貫く問いを意識させながら、事象を様々な視点で考察し関連付ける探究的な学習を行うこと、単元末では本質的な因果関係を見いだした結果、習得した概念的知識を用いて単元を貫く問いと連動したパフォーマンス課題に取り組ませることが有効であると考えた。そこで、単元「『日本の開国』から時代の特色を捉えよう」の授業を行った結果、時代の特色を捉える力を育てることができることが分かった。このことから、パフォーマンス課題を取り入れた、歴史的事象を関連付けて捉える学習活動は、時代の特色を捉える力を育てるのに有効であるといえる。

キーワード：本質的な因果関係 概念的知識 多面的・多角的 パフォーマンス課題

I 研究題目設定の理由

現在、教育現場では将来の予測が難しい社会の変化に対応できる力の育成が求められている。社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめ（平成28年、以下「WG審議の取りまとめ」とする。）では、各教科等の本質に根ざした「見方・考え方」の育成が重視され、中学校社会科歴史的分野では「社会的事象を、時期や推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連付けたりすること」¹⁾と整理された。この「見方・考え方」は本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成や生きて働く知識の習得に不可欠であるとされる。すでに中央教育審議会答申（平成20年）の「社会科、地理歴史科、公民科の改善の基本方針」では「社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向」²⁾が示され、これを受けて現行の中学校学習指導要領（平成20年、以下「要領」とする。）では、例えば歴史的分野の内容（1）ウの中項目「時代を大観し表現する活動」による思考力、判断力、表現力の育成と時代の特色に対する確かな理解と定着が求められてきた。

しかし、これまでの歴史学習では個々の事象自体の学習や直接的な因果関係の理解が中心で、様々な

事象をまとめる概念を引き出したり、各時代の社会の在り方を大きく捉えさせたりする学習となっていない現状がある。岩田一彦（1994）は、社会の構造を理解するために、授業設計において単に事象の原因と結果をつなぐのではなく、本質的な因果関係を明示し組み込むことの必要性を述べている¹⁾。このことは、事象を様々な立場で捉えさせ、探究させることによって現象面の理解に留まらず、本質的な因果関係を見いだすことが重要であり、その結果、概念的知識が習得され、社会構造が理解できることを示している。そこで本研究では、本質的な因果関係を探究できるよう単元の学習内容を構造化する。学習者に単元の課題を明確に理解させ、探究させるために、探究型の授業構成とし、パフォーマンス課題を取り入れる。西岡加名恵（2008）は、パフォーマンス課題について「リアルな文脈の中で知識やスキルを応用・総合しつつ使いこなすことを求めるような課題」³⁾であると述べている。

以上のことから、事象を様々な立場で捉えさせて本質的な因果関係を見いだし、その結果習得した概念的知識を用いてパフォーマンス課題に取り組ませる一連の学習過程を通して、時代の特色を捉える力を育てることができると考え、本研究題目を設定した。

Ⅱ 研究の基本的な考え方

1 時代の特色を捉える力とは

(1) 時代の特色について

「要領」には「ウ 学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色を大観しとらえさせる。」⁴⁾とあり、時代区分の意味や、個々の時代の特色を捉えさせることが求められている。中学校学習指導要領解説社会編(平成20年, 以下「解説」とする。)では、歴史的分野の学習の中心は「我が国の歴史と関連する世界の歴史を背景に、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色など他の時代との共通点や相違点に着目して各時代の特色を明らかにした上で、我が国の歴史を大きくとらえさせること」⁵⁾と示されている。このことから、歴史的事象を政治、経済、社会、文化など様々な側面から考察し、既習の時代と比較して総合的に解釈した内容を時代の特色とする。

(2) 時代の特色を捉えるとは

ア 時代の特色を捉える視点とは

時代の特色を捉えるにはどうすればよいのだろうか。「解説」では、社会科の目標にある「広い視野に立って」には「多面的・多角的な見方や考え方にかかわる意味」が含まれ、「社会的事象はそれを捉える観点によって大きく見え方が変化することから(中略)資料に基づいて多面的・多角的に考察する」必要が示されている⁽²⁾。「『多面的』とは学習対象としている社会的事象が様々な面をもっていること(中略)『多角的』とはそうした社会的事象を様々な角度から考察し理解すること」⁶⁾とされる。このことから、時代の特色を捉える視点とは、歴史的事象を政治、経済、社会、文化など様々な面で捉え、さらに政権担当者、民衆、外国など様々な立場で多角的に考察することである。例えば、江戸時代の「開国の影響」について政治面で捉え、幕府・諸藩・外国(欧米列強)の立場で多角的に考察した事例(幕長戦争)が図1である。

幕長戦争は、幕府が長州藩に大軍を率いて攻め入った結果、大敗した戦である。幕府の立場で考察すると、「開国によって低下した権威を取り戻そうとした戦い」という解釈になる。しかし、長州の立場で考察すると、「民兵団を動員するなど封建的身分制度を越えて、国民国家という新たな時代の基盤を取り入れ、雄藩の力を示した戦い」であり、更に、外国(欧米列強)の立場では「貿易の利益を確保できる安定した政権担当者を見極める戦い」と解釈で

きる。このように、どの立場で考察するのかによって解釈が変化する。また、「開国の影響」を経済面から考察すると、開港した町がにぎわう一方、生糸不足に困惑する商人や生産者、物価上昇に不満を抱く民衆の姿が見えてくる。

このことから、歴史的事象を多面的・多角的に考察することは、時代について総合的に解釈し時代の特色を捉えるのに欠かせない考える。

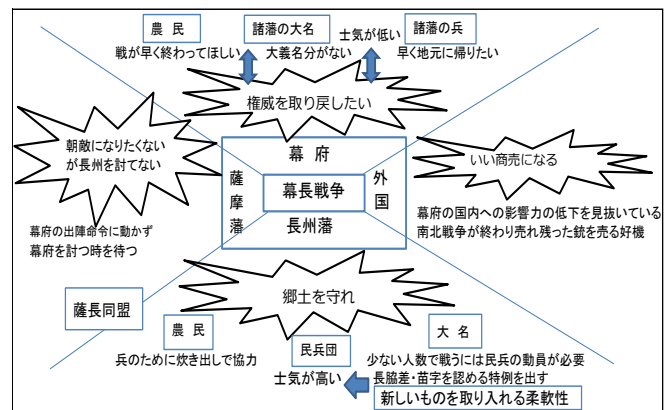


図1 歴史的事象を多角的に考察した事例

イ 関連付けと本質的な因果関係について

大杉昭英(2016)は、「WG審議の取りまとめ」で示された社会科で習得すべき知識について「教科等の本質を深く理解するために不可欠となる主要な概念のことを指し」⁷⁾、その習得の必要性が示されたことを述べている。さらに、浅野光俊(2009)は、歴史的事象を知識として習得し、その知識を活用して概念的知識を獲得するためには、事象間の関連付けが必要であると述べ、関連付けは歴史学習での事象間の関係を考える力や事象間の関係を因果関係で説明する力の育成につながることを述べている⁽³⁾。岩田(2001)は関連付けについて、情報間の結び付きを図る問いを「何故疑問」とし、その追究によって事象間の関係を認識することで「社会がわかる」と述べている⁽⁴⁾。岩田(1991)によると、社会認識を得るには現象的な因果関係に留めるのではなく、本質的な因果関係の追究を中心に授業設計する必要がある。本質的な因果関係とは、事象を多面的に考察し追究した結果、事象の因果関係を説明できるものとして習得される概念や法則性とされる⁽⁵⁾。

例えば、図1に示す幕長戦争の学習では、大軍の幕府側が敗れた原因を「幕府軍の士気が低く、武器が旧式で作戦に失敗したから」とするのは現象的な因果関係にすぎず、「開国に伴う幕府の権威低下によって政権維持に焦る幕府に対して、長州藩は藩論を統

一し近代的改革を取り入れ力を付けたから、また、欧米列強は対日外交を薩摩・長州支持に転換したから」とするのが本質的な因果関係である。その結果、「政権とは権威を高め、権力を維持しようとするものである。権威の低下した政権は崩壊する。」という概念的知識を習得できる。こうした追究によって、幕藩体制を支えてきた社会構造が国民国家という現在に通じる新たな社会構造へと変容しつつあることを理解でき、政権の権威や権力との関係を軸に歴史的事象を解釈することが、様々な時代の特色を捉えることにつながると考える。例えば「足利義教の暗殺や応仁の乱で権威を失った室町幕府は衰退した。」という他の時代の事象を説明できるのである。

(3) 時代の特色を捉える力とは

(1) と (2) の内容を踏まえ、本研究における時代の特色を捉える力を、「歴史的事象を多面的・多角的に考察し、事象同士を関連付けることで本質的な因果関係を見だし、概念的知識を習得する力」と定義する。

2 パフォーマンス課題を取り入れた、歴史的事象を関連付けて捉える学習活動について

(1) 歴史的事象を関連付けて捉える学習活動について

ア 探究的な学習について

先述のように、岩田（1994）は探究的な学習について、社会認識を形成するには「何故疑問」の探究による知識の総合化が必要であることを述べていることから、本研究では単元を貫く問いを設定し、歴史的事象を多面的に捉える1時間ごとの学習活動で「何故疑問」を探究し、更に本質的な因果関係を見いだした結果、習得した概念的知識を用いて説明するパフォーマンス課題に取り組む学習活動を行う。その学習活動の過程を次の表1に示す。

表1 本研究での時代の特色を捉える学習活動の過程

第一次	学習課題（学習の見通しをもつ段階） 単元を貫く問い、パフォーマンス課題とルーブリックを提示する。
第二次	多面的・多角的に考察する。（知る段階） 経済面・政治面・外交面から多面的に事象を捉える。 様々な立場で多角的に考察する。 ↓ 本質的な因果関係を見いだす。（分かる段階） 事象同士を関連付ける。 既習の時代と比較する。（共通点と相違点）
第三次	パフォーマンス課題に取り組む。（知識の再構築段階） 自己評価・相互評価（習得状況を把握する段階）

イ 概念的知識の習得とパフォーマンス評価の関連について

豊嶋啓司（2017）は、「パフォーマンス評価は、ある特定の文脈での人のパフォーマンス全体を直接的に評価する方法の総称である。」⁸⁾と述べ、概念の形成はその活用によってのみ習得が確認できるとし、学習成果として再文脈化するパフォーマンス評価を通して検証できることを述べている⁽⁶⁾。本研究では歴史的事象を関連付けて本質的な因果関係を見だし、習得した概念的知識の再構築を促すためにパフォーマンス課題を取り入れる。さらに、生徒が自己評価や相互評価をするパフォーマンス評価を学習活動に取り入れることとする。

ウ 時代の特色を捉える学習を繰り返して行うイメージ

時代の特色を捉える力を育てるには、習得した概念的知識を活用して、他の時代でも学習を繰り返す必要がある。そのイメージを図2に示す。

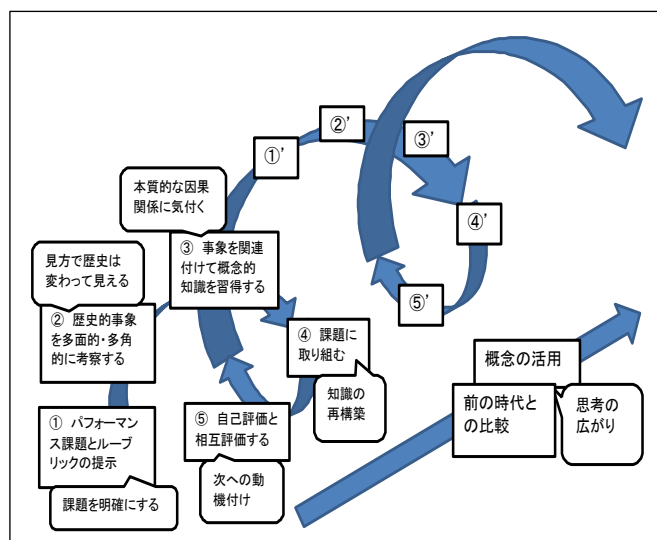


図2 時代の特色を捉える学習を繰り返して行うイメージ

(2) 習得した概念的知識を活用するパフォーマンス課題について

ア 本研究におけるパフォーマンス課題の位置付けについて

西岡（2008）が述べるように、パフォーマンス課題とはリアルな文脈の中で様々な知識やスキルを応用・総合してレポートや新聞等の作品や、プレゼンテーション等の実演・実技を評価する課題である。そのため、単元の学習の初めに提示して単元の学習課題を明確にし、毎時間の授業で単元を貫く問いを意識させることで見通しをもった学習を可能にする。さらに、単元の最後に取り組ませることによ

概念的知識	<p>・政権とは権威を高め、権力を維持しようとするものである。権威の低下した政権は崩壊する。</p> <p>⇒江戸幕府は政権の維持に奔走したが、幕藩体制が社会の近代化にそぐわないのに加え、開国に伴う権威の低下から、人々の支持を得られなくなり倒された。</p>										
	<p>・（瓦版の作成）鎖国と開国は現象面では逆だが、幕府にとって政権維持には有効な外交策だった。民衆のことを考えないで幕府に対して、民衆は新しい世の中を望んだ。欧米列強の支配に屈しない強い国をつくるしかない」と悟った諸藩が攘夷へ倒幕へと動いた結果、支持を失った江戸幕府は倒された。</p>		<p>・（時代の特色）一連の出来事で幕府は政権維持に奔走し、将軍は議長として政治の実権を維持しようとした政敵まででした。しかし、民衆は幕府への不満をええやう王政復古の大号令によって幕府政治を阻んだこと</p>		<p>・（政治面）江戸幕府は開国によって低下した権威を取り戻すため幕長戦争を起こした。しかし、民兵の活用など国民国家の基本でない発想を取り入れた長州軍に対して、封建的な体制で土氣の低かった幕府軍は敗れた。結果、幕府の権威は益々低下し、倒幕への動きが加速した。</p>		<p>・（経済・社会面）産業革命に成功して近代社会を成立させた欧米列強は、市場及び原料供給地を求めて東アジアにも進出した。結果、開国後の日本も市場の一つに組み込まれた。生糸や養蚕紙などの原料が輸出され、綿製品などの工業製品の輸入が増えるなど国内の物価は上昇し、経済は混乱した。</p>				
	<p>・（政治・外交面）蒸気船で来航したアメリカの圧力に屈した江戸幕府は、朝廷の許可を得ないまま不平等条約を結んだ。その背景には、アメリカの産業革命や補給船への薪水供給先としての役割があった。幕府による開国は、日清戦争に敗れた清の二の舞にならないための苦肉の策だった。</p>										
	<p>具体的知識</p>		<p>・（政治・外交面）蒸気船で来航したアメリカの圧力に屈した江戸幕府は、朝廷の許可を得ないまま不平等条約を結んだ。その背景には、アメリカの産業革命や補給船への薪水供給先としての役割があった。幕府による開国は、日清戦争に敗れた清の二の舞にならないための苦肉の策だった。</p>		<p>・（経済・社会面）産業革命に成功して近代社会を成立させた欧米列強は、市場及び原料供給地を求めて東アジアにも進出した。結果、開国後の日本も市場の一つに組み込まれた。生糸や養蚕紙などの原料が輸出され、綿製品などの工業製品の輸入が増えるなど国内の物価は上昇し、経済は混乱した。</p>		<p>・（政治面）江戸幕府は開国によって低下した権威を取り戻すため幕長戦争を起こした。しかし、民兵の活用など国民国家の基本でない発想を取り入れた長州軍に対して、封建的な体制で土氣の低かった幕府軍は敗れた。結果、幕府の権威は益々低下し、倒幕への動きが加速した。</p>		<p>・（時代の特色）一連の出来事で幕府は政権維持に奔走し、将軍は議長として政治の実権を維持しようとした政敵まででした。しかし、民衆は幕府への不満をええやう王政復古の大号令によって幕府政治を阻んだこと</p>		<p>・（瓦版の作成）鎖国と開国は現象面では逆だが、幕府にとって政権維持には有効な外交策だった。民衆のことを考えないで幕府に対して、民衆は新しい世の中を望んだ。欧米列強の支配に屈しない強い国をつくるしかない」と悟った諸藩が攘夷へ倒幕へと動いた結果、支持を失った江戸幕府は倒された。</p>
	<p>用語・語句 レペルの知識</p>	<p>ペリール束航 日米和親条約 日米修好通商 条約（関税自主権の喪失を認める権利を認めらる）</p>	<p>物価の上昇 物直しの揆</p>	<p>綿製品 生糸 （原料の輸出）</p>	<p>下関事件 幕長戦争 薩長同盟</p>	<p>戊辰戦争 大政奉還 王政復古の 大号令</p>	<p>ええいかな い</p>	<p>公武合体 桜田門外の変</p>			

図5 単元「『日本の開国』から時代の特徴を捉えよう」における知識の構造図

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

単元『日本の開国』から時代の特徴を捉えよう」において、歴史的事象を多面的・多角的に考察し、事象を関連付けて本質的な因果関係を見いだした結果、習得した概念的知識を用いて事象を説明するパフォーマンス課題に取り組むことによって、時代の特徴を捉える力を育てることができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表4に示す。

表4 検証の視点と方法

検証の視点	方法
歴史的事象を多面的・多角的に考察し、本質的な因果関係を見いだした結果、習得した概念的知識を用いて時代の特徴を説明することができたか。	ブレデスト ポステスト 瓦版 ワークシート
概念的知識を用いて事象を説明するパフォーマンス課題は、時代の特徴を捉える力を育てるのに有効であったか。	アンケート ワークシート

(1) プレテスト及びポストテストについて

時代の特徴を捉える力に関するプレテスト、ポストテストを実施した。プレテストを図6に、ポストテストを図7に示す。

【資料】幕府の対外政策について

(1) 資料から江戸幕府はなぜ鎖国をしたのか、鎖国をしたことで各立場の人々にどのような影響があったのかを□に記入しなさい。

(2) (1)をもとに、鎖国をしたころはどのような時代なのかを、簡潔に説明しなさい。

図6 プレテスト

【年表】開国から江戸幕府滅亡までの幕府、諸藩、外国、民衆の動きについて

1853 開国 (貿易開始)	←	開国要求 不平等条約をつきつける	→	物価の上昇 ↓ 世直し一揆 打ちこわし ええじゃないか (戊辰戦争で江戸城が開城されると収まる)
1858 日米修好通商条約 (開国自主権がない、領事裁判権を認める)		イギリスから綿織物などの輸入が増える		
1858～59 安政の大獄	→	1860 桜田門外の変 1862 生麦事件 1863 下関事件	←	1863 薩英戦争 1863 下関を四か国が砲撃
1864, 1866 長州出兵	↔	1866 薩長同盟		
1867 大政奉還	↔	王政復古の大号令を天皇が出す		
1867 戊辰戦争	↔			
江戸幕府滅亡				

(1) 年表内の三つの出来事を取り上げて、その出来事が幕府・諸藩・外国・民衆に与えた影響をそれぞれの立場から考えて、下の□の中に書きなさい。

(2) (1) で記入した内容をまとめると、幕末のころはどのような時代なのかを、簡潔に説明しなさい。

図7 ポストテスト

本研究では、時代の特色を捉える力について、歴史的事象を多面的・多角的に考察し、事象同士を関連付けることで本質的な因果関係を見いだし、概念的知識を習得する力としている。そのため、プレテスト、ポストテストでは、事象を各立場で考察し、解釈したことを設問（１）で記述させ、本質的な因果関係を見い出すことで時代解釈ができていくのかについて設問（２）で説明させる構成とした。

(2) アンケートについて

アンケートは研究授業前と終了後に行う。四段階
 評定尺度法を用いて、時代の特色についての捉え及

びパフォーマンス課題を取り入れた学習の有効性について、生徒の意識を把握する。また、自由記述欄を設け、記述内容からも生徒の意識を把握する。

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

- 期 間 平成28年12月13日～平成28年12月22日
- 対 象 所属校第2学年（2学級48人）
- 単元名 「日本の開国」から時代の特色を捉えよう
- 目 標

開国の背景及び開国後の影響と幕府政治の推移について政治、経済、外交などから多面的に、幕府、諸藩、民衆、外国（欧米列強）の立場から多角的に考察し、鎖国との共通点と相違点に着目して本質的な因果関係を見いだし、説明することができる。

2 研究授業の指導計画(全7時間)

次	時	学 習 内 容
一	①	本単元のパフォーマンス課題とループリックについて知り、単元の学習への見通しをもつ。
二	②	〔政治・外交面〕幕府による開国までの経緯について、ペリー来航の意図を探究し、それに伴う条約の締結とその内容を理解する。
	③	〔経済・社会面〕貿易による国内への影響に気付き、幕府、民衆、外国の立場で開国をどう受け止めたのかを考察する。既習の時代の貿易と幕末の貿易の違いから、時代の変化を捉える。
	④	〔政治面〕幕長戦争の背景と経緯を幕府、長州藩、民衆などの立場から追究し、幕府の権威に対する人々の受け止めの変容を捉える。
	⑤	〔時代の特色〕開国とその後の様々な事象に見られる各立場（幕府、諸藩、民衆、外国）での共通した考えを探究し、事象同士を関連付けることで本質的な因果関係を見いだす。
	⑥	〔瓦版の作成〕時代の特色について事象を説明するパフォーマンス課題に取り組む。
三	⑦	〔自己評価と相互評価〕ループリックに基づいて自己評価し、学び合いの視点からグループ内でコメントを添えて相互評価する。

V 研究授業の分析と考察

1 概念的知識を習得することができたか

(1) 歴史的事象を多角的に捉えたか

プレテストとポストテストの設問（1）において歴史的事象を多角的に考察することができたのかについて次の図8に示す。事象を広い視野で捉えるため多面的・多角的に考察する必要があると考え、ここでは四つの立場（幕府、諸藩、民衆、外国）を取り上げて事象を考察できたのかを問うこととした。

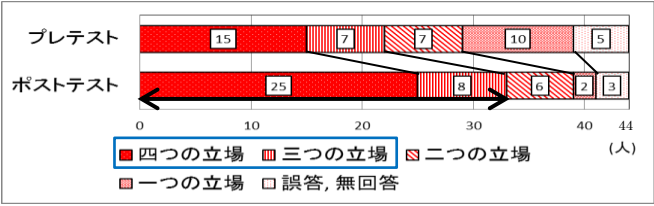


図8 設問（1）の結果

（欠席生徒もいたため44人での集計結果となっている。）

四つの立場で考察できた生徒はプレテストでの15人から、ポストテストでは25人に増えた。プレテストで幕府の立場からのみ捉えた生徒10人のうち、3人はポストテストでは四つの立場で、2人は三つの立場で考察できている。その結果、三つ以上の立場で捉えた生徒が、プレテストでの22人からポストテストでは33人に増加した。授業で幕府の立場だけでなく、民衆、諸藩や外国など複数の立場から事象を捉えたことで、多角的に考察する力が育ってきたものとする。このことは、時代について総合的に解釈し時代の特色を捉えることにつながる。様々な立場で事象を捉えるために用いたワークシートの一例を図9に示す。

勝敗を決める要因は何だったのだろうか？

幕府側	立場等	長州側
	兵力	
	大名	
	兵士	
	農民	

幕府の権威は()

図9 事象を多角的に捉えるワークシートの一例

ポストテストで誤答だった3人は、各事象をどの立場で説明すればよいのかは捉えていたことから、因果関係で事象を整理すれば解答できると考える。

(2) 歴史的事象を多面的に捉えたか

次のワークシートの記述は、プレテストでは二つの立場で事象を考察していたが、ポストテストでは四つの立場に増えた生徒aによるものである。開国の影響について政治面からだけでなく、外交面から欧米列強との関係を捉えて記述している。

〔第②時〕日本はアメリカと不平等条約を結んでアメリカの言いなりだなと思った。
〔第③時〕開国後の日本には利益がなく、イギリスばかりに利益がある貿易なのに、清みたいにならなくてやめられなかったと思う。
〔第⑤時〕幕府は信用されていないと思った。開国して権威が低下していったのはイギリスの影響が大きかったからだと思う。

生徒aのワークシートの記述

（波線部は稿者による）

1 時間毎の授業でこの時間は政治面から、次時は経済面からというように事象を捉える面を焦点化し、それを複数の立場で捉えさせていく単元構成の工夫によって、多面的に考察する力が育ってきたものとする。

(3) 概念的知識を習得し、時代の特色を説明することができたか

ア プレテストとポストテストの分析から

設問（2）について本質的な因果関係を捉えた記述ができたのかを図10に示す。

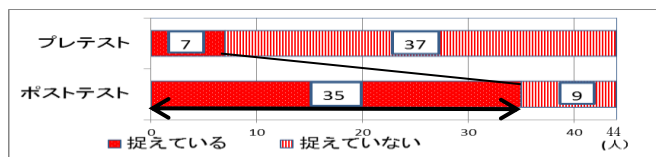


図10 本質的な因果関係について設問（2）の結果

プレテストでは、鎖国の原因を「キリスト教が入ってこないようにするため」という現象的因果関係で捉えた記述が多く、「思想・宗教統制及び貿易による経済的利益の独占によって幕藩体制を確立するため」という本質的な因果関係を捉えた記述は7人であった。しかし、ポストテストでは、開国に伴う幕府の一連の行動に対し「幕府による政権維持のため」という本質的な因果関係を捉えた記述が35人に増えた。そのほとんどは、前頁の図8で三つ、または四つの立場から事象を考察できた生徒であり、開国が当時の幕府にとって政権維持のためにやむを得ない選択であったこと及び物価の上昇を伴う国内経済の混乱を招き、人々の支持を失ったことを捉えていた。その結果、ポストテストでは習得した概念的知識を用いて説明できたと考えられ、本質的な因果関係を見いだしたことが、複雑な幕末の時代背景を捉えるのに効果的だったと考えられる。ポストテストで本質的な因果関係を見いだすことができるようになった生徒bの記述を示す。

プレテスト	独自の文化が発展した時代。
ポストテスト	幕末は開国して貿易したことで、外国は有利になるものの、民衆の生活は苦しくなり、幕府に反対する人たちも増え、幕府の権威がなくなっていった時代。

生徒bの記述（波線部は稿者による）

この生徒は、時代の特色について幕府の立場で文化面から鎖国の影響を捉えていたが、ポストテストでは幕府の権威低下の背景を政治面だけでなく、経済面からも捉え、幕府だけでなく外国や民衆の立場から事象を総合的に捉えた結果「幕府の権威失墜と

人々からの支持喪失」という概念的知識を習得したと考えられる。

イ 瓦版への記述内容の分析から

次の図11は瓦版の分析結果である。概念的知識を用いたB評価以上の生徒が40人（90.9%）になったことが分かる。

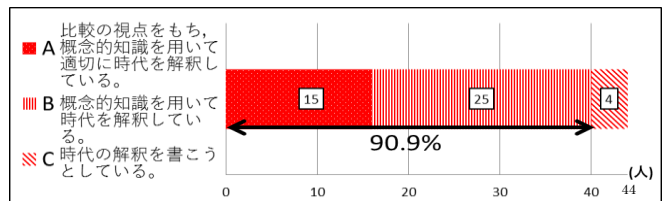


図11 概念的知識を用いた記述

各立場の一連の行動の意図を追究することで事象を関連付け、幕府の権威低下とその背景及び政権維持への焦りという本質的な因果関係を見いだした結果であることが分かる。概念的知識を用いて説明することができた生徒bの瓦版の一部を示す。

生糸や米を買う民衆は、物価が上昇したことで生活が苦しくなり、生糸で織物を作る人たちは糸のききんにあって大変だった。（中略）幕府は幕長戦争で何とかして低下した権威を取り戻そうとしたけれど（以下略）

生徒bの記述（波線部は稿者による）

C評価であった4人は幕府が政権維持のために様々な手段を講じたことは理解しているが、他の立場の行動と関連付けて整理することが不十分であった。支援の仕方について今後検討する必要がある。

2 概念的知識を用いて事象を説明するパフォーマンス課題は、時代の特色を捉える力を育てるのに有効であったか。

(1) アンケートの分析

図12に、概念的知識を用いて事象を説明するパフォーマンス課題の有効性についてのアンケート結果を示す。

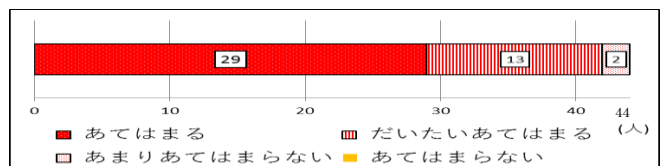


図12 概念的知識を用いて事象を説明するパフォーマンス課題の有効性

多くの生徒が「分かりやすかったから」と回答しており、「瓦版を書くことで、もう一度開国につい

て考え、自分の考えをまとめることができたから」
「様々な視点で物事を見ていったので、時代の流れが分かったから」「一つの視点からだけではなく、多くの視点から捉えることで、より深く、江戸時代末期のことを知ることができたと思ったから」など歴史的事象を多面的・多角的に捉えることで、時代について説明することができるようになったとする記述が多数見られた。中には、「学習したことを自分で考えてまとめ、それを客観的に評価してもらうことで考えがより深まったから」「書いた瓦版を他の人に見せるので、その分工夫したから」と相互評価の有効性を示す記述も見られた。

(2) ワークシートの記述内容の分析

次の表5に、先述の生徒bの自己評価と生徒bに対する生徒c, dからの相互評価の記述を示す。

表5 生徒bの自己評価と生徒bへの相互評価

生徒b	仲間の瓦版を読んで、とても分かりやすかった。自分は頑張って書いたけど、「だからこうなった」という所を簡潔にまとめて書けたらよかった。次はもっと良いものにしたい。
生徒c	bさんは調べたことや、自分で考えたことをたくさん書いていたので、お手本にしたいと思った。
生徒d	幕長戦争で長州藩が勝利した要因を、様々な立場から考えて書いてあってとても分かりやすかったです。

(波線部は稿者による)

自己評価の中で生徒bは、見いだした本質的な因果関係を踏まえた分かりやすい表現を次への課題としている。生徒cは調べた内容を解釈して表現する大切さを評価しており、生徒dは事象を多角的に見ていく大切さに気付き、事象を本質的な因果関係で捉えて整理すれば、多くの情報を分かりやすく説明できると気付いた記述をしている。こうした一連の学習活動への肯定的な受け止めは、次の取組への動機付けに役立つと考える。

以上のことから、概念的知識を用いて事象を説明するパフォーマンス課題は、時代の特色を捉える力を育てるのに有効であったといえる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

歴史的事象を多面的・多角的に考察し、本質的な因果関係を見いだすことで時代の特色を捉える力が育ってきたといえる。また、単元の学習を通して習得した概念的知識を活用して説明するパフォーマンス課題に取り組ませることは、時代の特色についての思考を整理する、つまり知識の再構築に役立つこ

とが分かった。さらに、肯定的な視点に立った相互評価は次への動機付けに役立つことを確認することができた。

本研究を通して、単元を貫く問いと連動するパフォーマンス課題を取り入れた、歴史的事象を関連付けて捉える学習活動は、時代の特色を捉える力を育てるのに有効であると考えられる。

2 研究の課題

時代の特色を捉える力を育てるために時代の転換期を扱う他の単元や他の時代でも、習得した概念的知識を活用して学習を繰り返し行う必要がある。また、個々の事象を考察することはできるが、概念的知識の習得に課題が残る生徒も見られたため、支援の在り方を検討し今後の授業改善につなげる。さらに、生徒が歴史を過去のものとして受け止めるだけでなく、歴史を学ぶことは現在につながると認識できるように、他分野や他教科との接続を意識して事象を見る視点を高める研究を継続していく。

【注】

- (1) 岩田一彦 (1994) : 『社会科授業研究の理論』明治図書 p. 90に詳しい。
- (2) 文部科学省 (平成20年) : 『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版p. 17に詳しい。
- (3) 浅野光俊 (2009) : 「『近現代史の学習』はこう教える」『中学校社会科「新教材」授業設計プラン』明治図書 p. 66に詳しい。
- (4) 岩田一彦 (2001) : 『社会科固有の授業理論30の提言 総合的学習との関係を明確にする視点』明治図書pp. 90-91に詳しい。
- (5) 岩田一彦 (1991) : 『小学校社会科の授業設計』東京書籍pp. 27-28に詳しい。
- (6) 豊島啓司 (2017) : 「社会科授業づくりの課題と取り組み一指導要領改訂を見据えて」『社会科教育No.694』明治図書pp. 112-113に詳しい。
- (7) 岩田一彦 (2001) : 前掲書pp. 45-47に詳しい。
- (8) 北俊夫 (2015) : 『知識の構造図を生かす問題解決的な授業づくり』明治図書p. 20に詳しい。
- (9) 北俊夫 (2015) : 前掲書pp. 17-24に詳しい。

【引用文献】

- (1) 中央教育審議会 (平成28年) : 『社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』文部科学省p. 2
- (2) 中央教育審議会 (平成20年) : 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)』文部科学省p. 80
- (3) 西岡加名恵編著 (2008) : 『逆引き設計で確かな学力を保障する』明治図書p. 14
- (4) 文部科学省 (平成20年) : 『中学校学習指導要領』p. 36
- (5) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書(2)p. 67
- (6) 文部科学省 (平成20年) : 前掲書(2)p. 17
- (7) 大杉昭英 (2016) : 「社会科教育改革のマスターキー」『社会科教育No.693』明治図書p. 110
- (8) 豊島啓司 (2017) : 前掲書p. 113

【参考文献】

- 三藤あさみ・西岡加名恵編著 (2010) : 『パフォーマンス評価にどう取り組むか』日本標準